

Title	テマ制度の成立
Sub Title	
Author	矢部, 荘
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.125(623)- 126(624)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0129">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0129</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るこの著書は、歴史の考察を文明単位でおこなうことを主張し、その構造と変動の規則性を明らかにした。この主張は、第二世代とも呼ぶべき、何人かの著名な研究者にうけつがれる。その中でアーノルド・トインビーは著書「歴史の研究」十巻をはじめとする多くの文明の研究で、特に有名となる。しかし現在は、この専門分野の第三世代とも言うべき若い研究者を輩出しつつある。彼らは、それまでの研究成果を土台に、より精密に、より科学的に、歴史研究を進める。そのなかでもフィリップ・バグビーの「文化と歴史」は、それまでなおざりにされていた、文化及び文明の定義を明確におこなっている点注目される。とかくバラバラな個々の例をあげていたにすぎぬ文化と文明の概念は、彼の努力により明確なものとなった。加えて多くの批判に答えて出したトインビーの「再考察」は、彼の欠点とされた理論的説明の欠如をおぎなっており、充実した理論の展開がなされている。歴史における文化と文明がよりはつきりした存在となるためには、それぞれの基本的性格をもう一度再確認する必要がある。第三世代の研究者の成果を見ながら、文化と文明の基本的性格の再確認をおこなってみたい。そのあと、実際の例を考えてみたい。ともかく、比較文化史Ⅱ文明論は、今その基本の再検討の時期にあらう。

### Beda の歴史的作りに関する一考察

—Historia ecclesiastica gentis Anglorumを中心として—

高橋 紀子

Beda は Northumbria の Wearmouth Jarrow 修道院の敬虔な修道士であり、多くの著作を残したが、特に彼の歴史的作りのために偉大な歴史家としても高く評価されている。彼の代表作ともいえるべき Historia ecclesiastica gentis Anglorum (「イギリス教会史」)を中心として、彼の実証的精神及び史観についての考察を行った。彼の実証的傾向を知る為に必要と思われるので、生涯の略伝を書く事によつて彼の修道士及び学者としての誠実さを知る様に努め、次に彼の歴史的関心を生み出すと同時に「イギリス教会史」を書く為の基礎となつたと思われる年代学、年代記及び聖徒伝について考察し、それが「イギリス教会史」において、いかに発展され、いかなる点に実証的精神があらわれているかという事、更に作中の幾つかの事件及び事柄を通して、いかに彼の史観があらわれ、それがどの様なものであつたかという事を考察した。

### テマ制度の成立

矢部 莊

テマ (Tema) 制度は七世紀頃より実施されたビザンツ帝国の属州行政組織である。最近二十年間のテマ制度論争はテマ制度が何時発生したかという問題に論議が集中した。この根底にはオストロゴルスキーによつて代表される従来の定説への批判がある。即ち七世紀の前半に自由農民層の増大による社会的基礎の断層的社会変革が起つたという定説への批判の一環がテマ発生論争であ

る。本論文ではこのテーマ発生論争の一端を紹介する。

十九世紀イギリス実証主義運動に関する一考察

森 淳 子

フランスでの実証主義は、十九世紀のなかば頃からイギリスにひろまったが、この点で大きな役割を果たした John Stuart Mill の思想(一八〇六一一八七三)を Auguste Comte (一七九八一八五七)とのかかわり合いから述べ、更にこのようにしてイギリスに入ってきた実証主義の思想と運動、特に Oxford の Wadham College における Richard Congreve, (一八一八一八九九) E. S. Beesly (一八三一—一九一四), J. H. Bridges (一八三二—一九〇六), F. Harrison (一八三一—一九二三) (彼らの殆どは、宗教的には evangelical の要素を強くもつものであるが)等を中心としたイギリス実証主義の運動を、一八六〇・七〇年代イギリスの社会的・政治的な動きとの関連から考察したものである。

彼等が主張する問題に関しては、主として、Fortnightly Review 及び彼等の雑誌 Positivist Review のなかの論文等を参照した。

ピューリタニズムの起源

— L. J. トリネリユードの見解をめぐって —

上山 雄 治

ピューリタニズムの本質と起源についての伝統的な解釈は、メリー治下に迫害された英国のプロテスタントたちが大陸に亡命し、ジュネーヴのカルヴィンによる改革の成果を見、エリザベス登位と共に帰国した時それにならつたもので、本質的にはカルヴィニズム特にその中核にある「予定説」こそピューリタニズムを特色づけるとする。

それに対し重要な反論が試みられた。マコーミック神学校の教会史学者 L. J. トリネリユードはペリー・ミラーに示唆を得てピューリタニズムの神学の本質は「契約神学」であるとし、その系譜をたずねることにより起源をきわめ得るとした。文献的にはウィリアム・ティンダルが最初だが、これはもともと英国土着のもので世俗的にはコモンロー、宗教的には「オーガスチアニズム」の伝統の中に存していた。もし神学的な関連を大陸に求めるならそれはライオンランドの改革派の神学である。彼はこの見解を「The Origins of Puritanism, Church History XX, The American Society of Church History, 1951」で発表した。

彼はピューリタニズムの英国土着性と、大陸との関係においてカルヴィンと断絶するという二重の仕方で通説を否認しているが既に有力な学説となつている。彼のこうした見解を最初に我が国で紹介したのは東神大の大木英夫氏で「同大学神学会編『神学』XXIII, XXV (1963), XXVI (1964)で「ピューリタンの契約神学」として発表された。

本論文はトリネリユードの論旨の紹介と批判であり、大木英夫